サハリンに関する社会言語学的研究の動向と展望
―方言・言語接触の観点より―

● 松本　和子・吉田　さち

1．はじめに

本稿は現在のロシア連邦領サハリン、かつての「樺太」に関する社会言語学的研究の動向を探り、今後の調査研究の展望を明確にすることを目的としたものである。サハリンは日本やソ連、ロシアによる支配によって、各国本土から大量の入植者が移り住み、先住民族が少数派として暮らしてきたという歴史を有する地である。こうした複雑な歴史的背景を持つ多民族・多言語社会サハリンは、言語接触・方言接触の帰結としてどのような言語学的結果が生み出され得るのかを探るうえで最適な地域であると言える。

以下、まず第２節でサハリンの背景について述べる。第３節ではサハリンで話されている日本語変種、朝鮮語変種、さらにサハリンのロシア語変種で使われている日本語と朝鮮語由来の借用語に関する先行研究を概述したうえで批判的考察を行う。最後の第４節では今後の研究に求められる方向性・展望を述べる。

2．背景

2.1.　サハリンの概要

サハリンは北海道の最北端にある宗谷岬の北約43kmに位置する南北に細長い島であり、現在はロシア連邦に属する。サハリン島はもともと多民族の島である。古代、サハリンに居住していた民族は、アムール川に沿って西から東へ流れてきたモンゴロイド系の民族と日本列島から北へ流れてきたアイヌ人の祖先である縄文人の二系統であったと言われている（ステファン 1973; Vysokov 2008）。さらに、17世紀までにはウイルタ人、ニヴフ人、エヴェンキ人、アイヌ人の４つの民族が居住していた（Fajst & Matsumoto 2020）。

18世紀に入ると、日本とロシアの勢力が及び始め、サハリンは日露の係争地となる（大沼 1992）。19世紀（1870～80年代）には沿海州から朝鮮人の移住が始まった（クージン 1998）。明治８年（1875年）、樺太千島交換条約によりサハリンはロシア領となる。その後、日露戦争後の明治38年（1905年）に締結されたポーツマス条約により、島の北緯50度以南が日本領となり、南サハリンに住んでいたほとんどのロシア人は北サハリンあるいは大陸に移住することとなった。終戦まで豊原（現在のユジノサハリンスク）に樺太庁が置かれた。第二次世界大戦後はソ連領になり、ソ連解体後はロシア領となっている。

2019年現在の人口は、49.0万人である（北海道サハリン事務所 2019）。2010年のサハリンの民族構成はロシア人82.3%、朝鮮人5.0%、ウクライナ人2.4%、タタール人1.0 %、ベラルーシ人0.6%、ニヴフ人0.4%の他、少数民族も複数存在する（北海道サハリン事務所 2019）。

2.2.　日本統治時代

大沼（1992）によると、日本は南サハリンを領有した後、漁業、林業、石炭採掘、パルプ工業などを中心に経済開発を進め、本土から大量の労働者・移住者が渡っていったという。特に、1930

年代以降は炭坑の開発が急速に進められ、日本人だけでなく、日本内地から多くの朝鮮人も渡っていったという（大沼 1992）。

樺太庁（1940）によると、1940年末、総人口（約39万９千人）に占める内地人（約38万２千人）の割合は95.7%、朝鮮人（約１万６千人）の割合は約４％となっている。これらの朝鮮人の大部分は朝鮮半島南部（現在の韓国）の出身だったという（大沼 1992）。その他にウイルタ人、ニヴフ人等の先住民族、外国人も存在していた。1940年の時点における本籍地の上位は、樺太、北海道、青森県、秋田県、宮城県、山形県の順（樺太庁 1940）であり、移住一世代目は、北海道および東北地方の出身者が大多数を占めていたことが分かる。

当時の学校教育についてみると、全人口の95%を占める日本人に対しては日本の教育と変わりがなく、また朝鮮民族は当初から日本人と同じ学校に通っていた（Fajst & Matsumoto 2020：７）。アイヌ人[1]、ウイルタ人、ニヴフ人などの先住民族に対しては「土人教育所」（樺太庁 1933）と呼ばれる学校を設立し、日本語教育を行っている。朝鮮人は日本人と同じ小学校（1941年以降は「国民学校」）へ通っていたため、日本語の習得に有利であったといえる。

また、中山（2012）の朝鮮人への聞き取りによると、戦前は家庭においても朝鮮語がほとんど用いられず、日本語を主に使っていたが、戦後ソ連が設立した朝鮮人民族学校での教育を通じて朝鮮語を本格的に学ぶ機会を得た場合も少なくなかったという。

2.3.　ソ連統治時代

戦後、1946年～1949年にかけて約29万３千人もの日本人がサハリンから引き揚げたが、サハリンに残留を余儀なくされた日本人も多数いた。受刑者やソ連が必要とした技術者、朝鮮人と結婚していた日本人女性たち等であり、総数で千数百名と言われる（大沼 1992）。それに対し、日本人としてサハリンに渡った朝鮮人は、敗戦した日本から朝鮮が分離されたことにより日本へ戻ることは許されず、また朝鮮は当時のソ連との間に国交が無かったために祖国朝鮮へ帰還することも許されなかった。戦争末期の朝鮮人の数についてクージン（1998）は樺太庁等のデータをもとに２万３千500人であったと述べている。

大沼（1992）によると、日本人引き揚げの少し前からサハリンには北朝鮮出身の労働者が大量に渡ってきており、ソ連本土からも民族的には朝鮮人に属するソ連人が渡ってきた。こうして戦後のサハリンには、戦前から戦争中にかけて移住し戦後帰れなかった朝鮮人、北朝鮮からの派遣労働者、朝鮮系ソ連人という三種類の朝鮮人が住むことになったという（大沼 1992）。

Fajst & Matsumoto（2020）によると1958年には41の民族学校が設立されていたという。ロシア語がサハリンの主流言語ではあったが、朝鮮語の新聞、朝鮮語のラジオ局、朝鮮語の図書館などの存在によって朝鮮民族のコミュニティ内で朝鮮語は維持されていたという（Fajst & Matsumoto 2020）。Fajst & Matsumoto（2020）は祖先の出身地である南部地域の方言が家庭では優勢だったのに対し、朝鮮学校での教授言語は教員が北朝鮮出身であるため北部地域の方言が用いられていたと指摘している。

ブレジネフ政権の下、朝鮮民族学校は1964年から65年にかけて閉校され、ソ連への同化が推進された（李月順 2016）。これによりロシア語への言語シフトが進んでいった。

そして、1990年のソ連と韓国の国交成立により韓国との往来が盛んになり、1992年からは永住帰国も可能になった（金美貞 2008）。こうして1990年代以降、韓国語との接触が増えるようにな

1　法改正により1933年からアイヌ人は日本人と同じ学校に通った。

り、サハリンで用いられる朝鮮語との違いが意識されるようになったという（金美貞 2008）。

なお、中山（2012：229）は、戦後に開設された民族学校で初めて朝鮮語に触れたような場合、ソ連時代においても家族や友人との会話は日本語で、職場での会話はロシア語主体というケースが多かったようであると述べている。

3．サハリンに関する社会言語学的研究の動向

本節では、サハリンに関する社会言語学的研究の動向を探るため、朝日(2012)、金美貞(2008)、Fajst & Matsumoto（2020）による先行研究を概述したうえで批判的に考察していく。第3.1節では日本統治時代を経験した日本人、朝鮮人、先住民族が話す日本語変種を、第3.2節ではサハリンに残留した朝鮮民族が話す朝鮮語変種、および日本語・朝鮮語・ロシア語間のコード切り替えの諸相を概述・考察していく。最後の第3.3節では、現在のサハリンで話されているロシア語変種で使用される日本語と朝鮮語の借用語の諸相を概述・考察していく。

3.1.　サハリンの日本語変種

朝日（2012）はサハリンで現在も使用されている日本語変種の特徴を明らかにすることを目的とし、朝日氏が収集したデータを中心にこれまでのサハリンに関する研究の集大成として明治書院より出版された著書である。本稿では朝日氏が収集したデータに基づき当該日本語変種の言語的特徴を考察している第４章と第７章の内容について概観する。以下、各章の方法論と分析結果について詳述していくが、著書（朝日 2012）では被験者情報やデータの量・タイプなどの詳細が記載されていないため、同じデータを扱っているAsahi（2008，2009a，2009b）の論文等から必要な情報を補うこととする。

朝日（2012）の第４章では日本語樺太方言の特徴について、アクセント、音声、形態、語彙、言語行動に分けて記述されている。まず、アクセントについては1938年に平山（1957）が当時の樺太で行った調査を2008年にもう一度行うことで、70年後のアクセントの変容を考察するという手法を取っている。調査対象者は２名で、そのうち１名は1938年に平山氏の調査に協力をした被験者で、戦後21歳で日本へ帰国し、以後60年以上の時間を札幌で過ごしている話者であり[2]、もう１名はその元同級生で同じく戦後樺太から札幌へ定住した話者である（Asahi 2009a：8–9）。調査語彙は34語の二拍名詞であり、読み上げタスクを行った際の録音をデータとして分析している。

その結果、この２名の話者のアクセントは４類・５類の二拍名詞では変化が見られなかったが、１類・２類・３類の二拍名詞の一部は当時の東京方言や北海道海岸方言などのアクセントパターンへとシフトしている、というものだった。こうした結果をまとめ、Asahi (2009a：18)は「the systematic linguistic change in the accentuation patterns did not occur in two [speakers]. In this regard, Karafuto dialect has been more or less same for the last seventy years（二名の話者にはアクセントパターンにおける体系だった変化はみられなかった。この点において樺太方言は70年間ほぼ変化がない）（著者らの訳）」と結論付けている。

ここで２つの疑問が生じてくる。まず、ここ60年以上を札幌で過ごしている話者２名のデータを分析したものから、「現在のサハリンで使用されている日本語樺太方言の特徴」（朝日2012：129）を記述することは可能なのだろうか。また、1930年代の札幌方言と樺太方言は同じアクセ

2　朝日（2012）の著書では２名のうち前者１名の被験者の結果のみが紹介されている。後者を含めなかった理由は述べられていない。

ントパターンであった（Asahi 2009a: 11, 20）と述べていることから、そもそも同じアクセントパターンを持つ地域へ移住した２名の話者のアクセントが変容していないことはごく自然のことのようにさえ思える。今後はサハリンに住み続けている日本人やその子孫から同様のデータを収集することで、当時の樺太方言の言語体系を明らかにし、その後の変容を調査考察していく必要があるように思われる。

意外なことに、Asahi（2008）では現在もサハリンに在住する日本人２名からもアクセントに関するデータを入手していた[3]。にもかかわらず、前述の２つの文献、つまり朝日氏のサハリンに関する研究の集大成として出版されたと思われる著書（朝日 2012）にも学術論文 Asahi（2009a）にも在樺日本人からのデータへの言及はなされていない。Asahi（2008）の分析結果と考察では「It is hard to find any tendencies common to [these two speakers]（２名に共通するアクセントの傾向を見い出し難い）」と記すに止まっており、より踏み込んだ考察は見当たらない。しかし、「日本語樺太方言の特徴」を明らかにするという目的を達成するためには、話者２名の間に共通するアクセントがあるかどうかよりも、1930年代の日本語樺太方言のアクセントパターンとの類似性・相違性を考察することのほうが有益であるように思われる。また、そもそもなぜ朝日（2012）の「日本語樺太方言」の著書に樺太在住者の分析結果を敢えて載せず、戦後日本へ帰還した日本人の分析結果のみが紹介されているのかは説明されていない。説明しにくい分析結果の公表を避けたのではないかという誤解を与えないためにもアカウンタビリティを果たす必要があるように思われる。

第７章では、第４章と同様に日本統治を経験した先住民族の二拍名詞のアクセントパターンを検証している。日本統治下に日本語を学習したウイルタ人１名を調査対象者として単語リストの読み上げタスクを行うとともに、自然発話のデータも収集し、そこに現れた二拍名詞を１類から５類に分けて分析している。一方、Asahi（2008）ではニヴフ人１名の自然発話データのみを基に同様の分析を行っている[4]。この２つの研究の結果の記述は以下３点の論文の中で異なっている（表１を参照）。朝日（2012：55）ではウイルタ人・ニヴフ人ともに（10語の）[5]アクセントに関しては平山（1957）の結果と同様に一型アクセントであり、アクセントの変化は70年前から生じていないと述べている。ところが、Asahi（2008，2009b）ではウイルタ人のみ一型アクセントであり、ニヴフ人は東京型アクセントパターンと類似していると述べ、見解が統一されていない。また、ウイルタ人の一型アクセントに関する具体的な説明においても、同一の平山（1957）を引用しながら Asahi（2008：12）では「final-tone raising type (Hirayama 1957)」、Asahi（2009b：37）

3　さらに２つの研究会の発表原稿集（朝日 2008a，20008b）では13名のサハリン在住日本人と上記の話者とは異なる２名の帰還者（現在は稚内在住）のデータを基にアクセントを分析していることが分かった。紙幅の制限によりレヴューは割愛するが、集大成と思われる明治書院からの著書（朝日 2012）にこうした分析を含めなかった理由は明らかにされていない。「日本語樺太方言の特徴」を明らかにするという著書の目的を達成するためには、戦後日本へ帰還した日本人よりも在樺日本人の方が適していると思われる。

4　著書（朝日 2012）ではウイルタ人１名のみのアクセントの分析が７章で扱われているが、同著書内（朝日 2012：55）ではウイルタ人とニヴフ人両方の日本語のアクセントの結果をまとめて述べているため、本稿ではニヴフ人１名のアクセントを分析している Asahi（2008，2009b）を補うこととした。

5　朝日氏の調査で用いた34語が平山（1957）で用いた単語リストと全て同一なのかどうかは明記されていないが、Asahi（2009a：11）の表４によると少なくとも10語は平山（1957）と同一のものであるようだ。したがって論文中では不明瞭であるが、「アクセントに関しては平山（1957）の結果と同様に一型アクセントである」という主張はその10語に関する結果について述べていると推測される。読者に推測させないような書き方を工夫する必要があるように思われる。

表１．ウイルタ人とニヴフ人の二拍名詞アクセントの調査結果に関する解説の対照表

引用元	ウイルタ人（1933年生まれ女性）	ニヴフ人（1936年生まれ男性）
Asahi（2008：12）	一型アクセント （final-tone raising type：Hirayama 1957）	東京型アクセントパターンと類似
Asahi（2009b：37）	一型アクセント （specific pattern unknown：Hirayama 1957）	東京型アクセントパターンと類似
朝日（2012：55）	一型アクセント	一型アクセント

では「specific pattern unknown (Hirayama 1957)」と述べ、２つの異なる説明をしており、読者に混乱を来している。

また朝日（2012）はウイルタ人の残り24語のアクセントが２種類のアクセントから成る二型アクセントであると指摘している。平山（1957）が1930年代の日本語樺太方言は三型アクセント（つまり３種類のアクセントが存在する）であったと説明していることから、朝日（2012：100）は「ウイルタ人話者に見られる日本語のアクセントはより単純である」と結論付けている。

しかし、平山（1957）は1930年代の調査でウイルタ人からもデータを収集しており、その日本語アクセントは一型アクセント（つまり１種類のアクセントのみ）であると結論付けている。よって、当時と現在のウイルタ人の日本語を比較すると、一型アクセントから二型アクセントへとアクセントの種類が増えていると解釈できる。つまり、朝日（2012：100）の主張する単純化とは逆の方向へ変化が進んでいるように見受けられるのである。せっかく当時のウイルタ人の分析結果があるならば、当時の日本人の分析結果と比較をするよりも当時のウイルタ人の分析結果と比較をする方が通時的変化を考察するには適しているように思われる。自然談話データに関しては、複雑なパターンのアクセントが観察されたことを記述し、これは調査法に特有の結果として「アクセントの実現形が様々」なのだ（朝日 2012：106）とまとめるに止まり、踏み込んだ考察・解釈は見当たらない。

ここまで朝日（2012）の第４章・第７章およびAsahi（2008，2009b）のアクセントの分析の概要とそれに対する批判的考察を記した。これらの調査研究では、①戦後帰還した日本人、②サハリン在住の日本人、③ウイルタ人、④ニヴフ人という４つの話者カテゴリーに属する話者数名から得たデータを定性的に分析しているが、その結果の解説は一貫性に乏しく、また何と何を比較することによって何を明らかにしようとしているのかが不明瞭に思われた。サハリンのように人口の流動性の高い地域では、話者ごとに接触の度合いが異なり、バリエーションの幅が大きくなる傾向にある（松本 2016：137）。また、必ずしも日本語の識字率が高いとは言えない地域で、二拍名詞の読み上げというタスクを通じてどれだけ信頼のおけるデータを得られるか、という点も議論する必要があるように思われる。今後はより多くの被験者から、より多様なデータを収集し、当時の社会構造や交流の傾向などに照らし合わせ、より緻密な分析を行うことで、日本語樺太方言の一定の傾向を示せるのではないだろうか。樺太時代を経験した日本語話者は激減しており、今がまさに最後の機会であると言えるだろう。

朝日（2012）の第４章ではアクセント以外にも、音声、形態、語彙、言語行動について、主にいくつかの発話例を示す形式で記述されている。ここでは、音声、形態、言語行動について概観し、語彙については文献をもとにした考察が行われていたので本稿では扱わないこととする。まず、音声的特徴としては、（１）北海道海岸部方言、東北方言などで観察されるイとエの混同が

見られたという。イとエの混同としては日本人３名、ウイルタ人１名の発話例が挙げられている。（２）道南地域、関東南部、東北などで観察されるヒとシの混同も見られたという。ヒとシの混同としては、日本人２名の例文が挙げられている。（３）ウイルタ人にみられる特徴としてチとツの交替（ウイルタ語の音韻体系に「ツ」が存在していないことによる）があるといい、ウイルタ人２名の例文が挙げられている。（４）鼻濁音の使用も認められたという。ただし具体的なデータの提示はされていない。

最後に、（５）北海道沿岸部、東北地方の方言的特徴であるカ行・タ行子音の有声化も観察されたと述べている点を議論したい。ここではアイヌ人１名、朝鮮人１名の発話例が挙げられている。しかし朝鮮人の例については、朝鮮語では語中の無声音は有声化されるため、朝鮮語の干渉の可能性も否定できないと思われる。後述する金美貞（2008）では、サハリン在住の朝鮮人が話す日本語における同じ現象（語中の無声音の有声化）を朝鮮語からの干渉と見なしている。また、後述する Fajst & Matsumoto（2020）では、サハリン在住の朝鮮人が用いる日本語由来の借用語における当該現象（語中の無声音の有声化）を朝鮮語からの干渉および北海道方言と東北方言からの影響という２つの要因を挙げている。母語の干渉の可能性についても話者のエスニシティや日本語能力なども踏まえて検証していく必要があるだろう。

形態レベルの特徴としては、（１）東北方言・北海道方言で使われる格助詞「サ」の使用が報告されている。日本人２名、アイヌ人１名の例文が挙げられている。（２）関東・東北に分布する格助詞「ベ」の使用も観察されたといい、朝鮮人１名、日本人１名の例文が挙げられている。（３）北東北で可能を表す「―ニイイ」の使用も見られたといい、ウイルタ人１名、日本人１名の例文が掲載されている。（４）アスペクト表現「―テイル」「―トル」の使用も見られ、朝鮮人２名、日本人２名の例文が挙げられている。（５）北海道方言・北東北方言で使用される人称代名詞が確認されたという。これについては日本語の談話資料で確認された人称代名詞が表にまとめられているが、何名のデータに基づいて表が作成されたのかは不明である。

言語行動にみられる特徴として、日本語とロシア語、朝鮮語を介在させたコード切り替えが頻繁に観察されることが報告されている。朝鮮人１名による日本語と朝鮮語の切り替えの例、アイヌ人１名による日本語・ロシア語の切り替えの例が挙げられている。前者の例として「なくなんなぐても横についてたよ。しかもその橋ね、よく話聞いたよ。して、その話もゆってから、あれ、고개 넘어서 친정 가니 하잖아요.（朝鮮語：峠を越えて実家に帰るとか言うじゃないですか。）」という発話が挙げられている。後者の例として「もう１回乗る船いぐって（地名）さ いつでもくるでしょ、パスポート調べに。Ещё один раз будет не волнуйтесь, поедем ещё.（ロシア語：もう一度船が出るから心配するな）Много（ロシア語：たくさん）も いっぱいいぐ 人 いるって」という発話が挙げられている。いずれも発話例を挙げるに止まり、どのレベルでコードの切り替えが起こり得るのか、あるいはコード切り替えの機能に関する考察などは行われていない。

朝日（2012）によると、上記の音声・形態・言語行動についての考察は現地で生活してきた日本人、1905年～1945年までの間に現地の日本語教育等で学習、または自然習得した日本語話者であるアイヌ人、ウイルタ人、朝鮮人、ニヴフ人たちをその調査対象者とし、彼らの自然談話資料をデータとしたと書かれている。しかし、被験者の民族ごとの人数・サハリンでの居住歴、自然談話データの録音時間については記載されていない。インフォーマントやデータに関する基本的な情報の提示は議論の前提として欠かせないものだと思われる。また変異理論を用いた定量的な考察は行われていないため、上記の現象がどれだけ頻繁に観察されるのか、朝日（2012）の主張する「日本語樺太方言の特徴」と呼べるほど一般的なものであるのかどうかを読者は判断できな

い。取っ掛かりの予備調査という位置づけであるならば一定の評価を与えられるが、今後はより緻密な実証研究を展開されることが期待される。

金美貞（2008）はサハリン在住の朝鮮人二世の言語使用の様相を明らかにするため、2007年にサハリン在住の60歳以上の朝鮮人二世５名より①日本人調査者との日本語のインタビューデータ、②韓国人調査者との朝鮮語のインタビューデータ、③インフォーマント同士の自然な談話データをそれぞれ約90分収集している。分析ではこの３種類の談話データを基にいくつかの例を提示し説明を加えるという形式を取っている。主たる分析内容は朝鮮人二世が使用する日本語変種の音声や表現上の特徴、朝鮮語変種に見られる方言の使用、日本語と朝鮮語とロシア語のコード切り替えなどである。

ここでは上記①の日本人調査者との日本語のインタビューデータに絞って概説していく。金美貞（2008）によると、①のデータを定性的に分析したところ、サハリン在住の朝鮮人が用いる日本語には広範にわたって朝鮮語の干渉と考えられる特徴が見られたという。音声面では、先述した語中の無声音の有声化が日本語能力の比較的高くない話者において観察されたという。例えば「暮らさながったよね」「聞いでみたら」「うぢ」等の例が挙げられている。先に見たように、朝日(2012)はサハリン在住の朝鮮人１名の話す日本語に語中の無声音の有声化が観察された際に、日本語の方言からの影響のみを考慮し、これを北海道沿岸部、東北地方の方言的特徴であると指摘している。一方、金美貞（2008）は話者の日本語能力と照らし合わせた考察を行うことで、日本語能力の低い話者は第一言語である朝鮮語からの干渉としてこうした現象が見られるが、日本語能力の高い話者ではこうした現象が起きないと結論付けており、それは理にかなっていると思われる。今後はより多くの調査対象者からデータを収集するとともに話者の日本語能力に関する知見も得ながら、この現象が日本語の方言からの影響なのか、それとも朝鮮語からの干渉によるものなのかなどをより慎重に議論することが望ましいと考える。さらに、金美貞（2008）は無声音の有声化などはランダムに現れていたと記している。今後は話者の日本語能力などの言語外的要因だけでなく、言語内的要因によって出現率が変わり得るのかどうか、言い換えれば、語中の無声音の有声化に何らかの言語学的制約を特定できるかどうかなど、詳細に分析する必要があるだろう。

また、日本語の発話の中に朝鮮語と発音が類似した語がある場合に日本語と朝鮮語をミックスしたような発音が現れたと指摘している。例えば、「イシャ（医者)」を「으シャ [ɯʃa], 의シャ [ɯiʃa]」と韓国語の重母音「의 [ɯi]」を意識したように発音した例が挙げられている。表現法においては、朝鮮語の干渉によると思われる日本語としては不自然に感じられる表現が見られた。「大阪できた」のように、韓国語の助詞「에서」(「에서」は「場所・意思」を表す「で」、①起点の「から」、②非人称の主語を表す「が」等の意味を持つ）の干渉の例等が報告されている。

ここまで金美貞（2008）の在樺朝鮮人二世５名を対象とした事例研究のうち、日本人調査者との日本語でのインタビューデータに関する分析の概要とそれに対する批判的考察を記した。この結果を一般化するためには、より多くの話者からデータ収集を行い、言語内的・外的諸要因を特定するなどの変異理論を用いた社会言語学的分析を行うことが重要だと考えられる。

3.2.　サハリンの朝鮮語変種と日朝露コード切り替え

先述した金美貞（2008）の研究で、サハリン在住の60歳以上の朝鮮人二世５名より収集した３種類のデータのうち、ここでは②韓国人調査者との朝鮮語のインタビューデータ、③インフォーマント同士の自然談話データ（それぞれ約90分）に関する分析結果（と思われるもの）を概観す

る。手法はこれまでと同じで、いくつかの例を示しながら説明するという定性的なものである。

まず、②韓国人調査者との朝鮮語のインタビューに関しては、一世の母方言である慶尚道・全羅道などの朝鮮半島南部の方言、および、朝鮮学校で使われた朝鮮半島北部の方言的な語彙が用いられていたと指摘している。南部方言の具体的な例は挙げられていないが、北部方言の語彙としては、韓国語で「忙しい」という意味で使われる「바쁘다」が、北朝鮮での「難しい」という意味で多用され、さらに日本語でも「難しかった」を「忙しがった」とする転移の例等が見られたという。

次に、金美貞（2008）は、日本語と朝鮮語の「code-switching（コード切り替え）」と呼ばれる現象に注目して分析している。日本語の発話に現れる朝鮮語は単語レベル、句や文レベルでも切り替えられたと記している。単語レベルのコード切り替えの例として、固有名詞(「조선」（朝鮮）等）や呼称（「언니야」（お姉ちゃん＋呼格助詞）等)、飲食名（「김치」（キムチ）等)、副詞（「막」（やたらに）等)、感嘆詞（「아이고」（ああ）等）などが多いことから、日本語で代用しにくい語彙や、感情表現にかかわる語彙が中心だと指摘している。また、文法的な機能を担う語が混ざる例として、朝鮮語の助詞（「-은」(-は）等)、接続詞（「그래서」（それで))、確認要求の文末語尾（「-지」（だよね)）を挙げている。特に朝鮮語の助詞の使用が広く見られたが、こうした現像は在日コリアンなど他の研究ではあまり報告されていないと指摘している。慶尚道方言の文末語尾（「-가」（か)）も現れていたという。

それとは対照的に朝鮮語の発話に出てくる日本語は、日本語発話に混ざる朝鮮語と比べてその数と出現頻度は低いが、名詞（「着物」等）やフィラー（「えーと」等)、副詞（「ちょうど」等）が現れたという。句や文レベルの混用も多く観察されたという。朝鮮語に切り替わりやすいのは、感情を表す内容の発話（調査者に話していたが、途中で日本人観光客に対する自分の感情を話すところで文間コード切り替えを行う等)、あるいは、意識に心内発話的なところで朝鮮語が出てしまっているとみられる場合（例：「んー　何っていうの？　잊었다（忘れた)．　忘れたね。」）も多いという。

一方、朝鮮語を基盤とした発話にはロシア語へのコード切り替えも頻繁に観察されたという。現れるロシア語は固有名詞や応答の「ダー（はい)」、あいづちの「ンフン」が多いが、文内で3言語が混ざることもあると述べられている。例えば、一人の話者による「ね、ちょっと　ⓡⓡⓡⓡⓡⓡⓡⓡⓡ　이거도 맛있고 아주 맛있는데（朝鮮語：これもおいしいし、とてもおいしいのに)」という発話の例が挙げられている。この例から明らかなようにロシア語の発話部分はⓡⓡと表示されるだけで書き起こしもされておらず、分析もなされていない。しかし話者たちの生活ではロシア語が主要な言語となっていることから、今後はロシア語の分析も進めていく必要があるであろう。

最後に、金美貞（2008：27）は在樺朝鮮人二世の談話で頻繁に切り替えが生じると述べ、その切り替えの要因に関しては「それぞれの言語をなんらかの動機や要因によって使い分けているとは考え難い」とし、「二つ以上の言語を混ぜて使うこと自体がかれらにとって自然な話し方のように思われる」と考察している。なお、金美貞（2008：23）によると、「サハリンでは朝鮮人が色々な言語変種を混ぜて使うのを『사할린 사투리（サハリン訛り)』と呼ぶ」のだという。

ここまで金美貞（2008）の在樺朝鮮人二世5名を対象とした事例研究のうち、韓国人調査者との朝鮮語でのインタビューデータ、および被験者同士の自然談話データに関する分析の概要を記した。金美貞（2008）はサハリンの朝鮮語変種を扱った最初の研究として、定性的にではあるがサハリンの朝鮮語には朝鮮半島の南部方言と北部方言の両方が見られることを示したことは意義

のあることだと評価される。しかし、コード切り替えに関しては２つ不明瞭な点があった。一つ目は用語の定義を示さないまま複数の類似した現象を言及する用語を使用しているため、著者の意図が不明瞭に思われた点であった。金美貞（2008）は「code-switching（コード切り替え）」と「code-mixing（コード混用）」について定義は示しておらず、「２つ以上の言語を同一場面で用いる言語行為にはコード切り替え（Code-Switching）、コードミキシング（Code-Mixing）という用語が与えられ（後略）」（金美貞 2008：23）とひとくくりにまとめている。その後の本文中に「日本語運用能力が不足しているために朝鮮語に切り替わる場合を除くと（後略）」（金美貞2008：25）という記述が見られることから、いわゆる「code-mixing（コード混用）」は分析の対象から外し、「code-switching（コード切り替え）」に焦点を当てていると考えられる。それ以外にも「混用」や「混用コード」という用語も用いており、それぞれの用語について定義を行ったうえで、厳密に使用する必要があると思われる。

二つ目の問題は、コード切り替えが起きた例やその解説や傾向を説明しているが、収集された３種類のデータのうち、どのデータについて述べているのか明記されていない点にある。例えば、コード切り替えは「サハリンの朝鮮人二世同士の会話で頻繁に観察される」（金美貞 2008：26，傍点は筆者）あるいは「どの言語で話しても様々なレベルで混用が見られ」（金美貞 2008：23，傍点は筆者）と述べていることから、③インフォーマント同士の自然談話データだけではなく、①日本語調査者との日本語のインタビューや②韓国人調査者との朝鮮語のインタビューでも（頻度こそ少ないけれど）コード切り替えが見られたと推測される。読者に推測させないような書き方を（つまり、どのデータをどの分析に用いたのかが読者にもわかるように）工夫する必要があるだろう。

今後は三世からもデータを収集し、定量的な分析を行うことで朝鮮語の方言間の接触やロシア語や日本語等との接触を経て、サハリンの朝鮮語変種がどのような変容を遂げているかを解明し、方言接触・言語接触の分野に新たな事例を提供していくことが望まれている。また、コード切り替えについてもより多くのデータを収集したうえで定量的な分析を行い、コード切り替えに関するさまざまな理論的枠組みを用いた考察を行うことで当該分野の理論構築に寄与できるであろう。また、在日コリアンのコード切り替えとの異同を明らかにすることで、ディアスポラ言語としての在外コリアンの言語の普遍性・個別性の解明にもつながると考えられる。

3.3.　サハリンのロシア語に見られる借用語

Fajst & Matsumoto（2020）はサハリンで話されているロシア語変種に借用語として取り込まれた日本語と朝鮮語について質問調査を行い、その結果を借用語に関する複数の理論的枠組みを採用しながら検証した論文である。具体的には、2018年９月～10月にインターネットにて質問調査を実施し、256名の有効回答から得た92語の日本語由来の借用語と177語の朝鮮語由来の借用語および回答者の背景情報（サハリンへの移住歴、日本語・朝鮮語の学習歴等）をデータとして分析している。３つの理論的枠組みを採用しており、その一つ目は「contact-induced borrowing scale（接触に誘発された借用語の尺度）」（Thomason 2001）で、サハリンにおける言語接触の度合いと借用語の種類の関係について考察している。二つ目は「borrowability（借用度合い）」（van Hout & Muysken 1994）を用いて借用された語彙を品詞別に考察し、どの品詞が最も多く借用されたのか、その順番を他の言語間の借用語に関する先行研究の結果と比較検証している。三つ目は、意味変化の類型論（Daulton 2008）を用いて借用の過程で起こる意味変化を４つに分類し詳述している。

まず、朝鮮語からの借用語の概要に関しては、エスニシティとサハリンへの移住時期が朝鮮語の借用語の使用に最も強く影響を与える社会的要因であることを指摘している。樺太時代に先祖がサハリンに移住した朝鮮系サハリン人は他の民族よりも朝鮮語の借用語をより多く使う傾向にあるという。また、朝鮮系サハリン人と非朝鮮系サハリン人では、借用語の意味分野の傾向も異なり、後者は主に食に関する借用語（例えば、국수“kuksu”「麺」）が多いが、前者は食に関する語彙だけでなく日用品（例えば、밥솥“bapsot”「釜」）、親族語彙（例えば、오빠“oppa”「お兄さん」）の借用語も多いという。品詞別では、非朝鮮系サハリン人は9割近くが名詞であるのに対し、朝鮮系サハリン人は名詞が7割程度で、続いて間投詞、形容詞、動詞の順番で借用されており、名詞以外が占める割合も非朝鮮系よりも大きいという。

また、借用語に朝鮮語の南部地域の方言的要素が確認されたことも指摘している。例えば/k/の口蓋音化は慶尚道、全羅道をはじめ南部地域に広く分布が見られる現象であるが、借用語である김치“kimchi”「キムチ」については語頭が口蓋音化された짐치“chimchi”（南部方言形）が多く報告されたという。さらに、ロシア語からの影響も観察され、例えば女性名詞に接続する語尾の‘-a’を伴うロシア語化された変異形 김차“kimcha”、さらには朝鮮語の南部方言形かつロシア語化された変異形の両方の要素を持ち合わせた 짐차“chimcha”という4つの変異形が現れたという。同様に국수“kuksu”「麺」についても、ロシア語化された変異形の국사“kuksa”が現れたという。ロシア語化された変異形またはロシア語化されていない変異形のどちらを使用するかについてはエスニシティによって統計上の有意な差があり、朝鮮系サハリン人はロシア語化されていない変異形を使用し、非朝鮮系サハリン人はロシア語化された変異形を使用する傾向があると説明している。

次に日本語の借用語に関しては、「着物」などの伝統的な日本文化、「オタク」などのマンガ・アニメ、「カツ丼」などの和食に関連するものが大半を占めたという。日本語の借用語について回答した話者は、日本語の借用語を「日常生活で」あるいは「アニメ好きな友人や日本語を理解する友人と」用いると答えており、またこれらの借用語はロシア語化されていないことから、日本語の借用語は樺太時代の日本語からの影響というよりも、現代日本の大衆文化、メディアの影響が大きいのではないかと筆者らは考察している。

さらに樺太時代に入ってきたと考えられる日本語の「座布団」“dzhabudon”、「流し」“nagashi”という借用語は、朝鮮系の回答者から「朝鮮語の借用語」として認識されていることから、これらの日本語は樺太時代に朝鮮語に取り込まれ、その後、朝鮮系サハリン人のロシア語の変種に移行したのではないかと考察している。先述の通り、「座布団」の語中の/t/が“dzhabudon”と有声化した要因として、著者らは2つの可能性を挙げている。一つは、日本語の北海道方言・東北方言の特徴であるタ行の有声化がそのまま借用語として朝鮮語へ組み込まれ、それが現地のロシア語変種でも採用された可能性である。もう一つは、この借用語の使用が朝鮮系サハリン人に多く見られることから、朝鮮語の語中の/p,t,k/が有声化する現象が日本語の借用語にも持ち込まれた可能性である。

Fajst & Matsumoto（2020）は山本（1968）と朝日（2012）の先行研究に基づき、日本語から漁撈語彙の借用語（計7語）[6]があるかどうかを探るための質問も行っている。その結果、7語の調査語彙を平均して90%以上の回答者が「聞いたことがない」と答え、さらに回答者の職業に関する問いで漁業関連の職業に従事していると回答した者のうち、これらの単語を「聞いたことがある」、あるいは「意味が分かる」と回答した人は皆無だったという。一方「聞いたことがある」と回答した者は日本語の学習歴がある比較的若い世代であったという。「あきあじ」という魚の

名前は「あき（秋）」と「あじ（味）」と部分的に意味が取れることから、こうした語彙を「聞いたことがある」と回答したケースが多かったのではないかと推察している。このことから、筆者らのデータからはサハリンの漁業関連のロシア語語彙には日本語由来の借用語は取り込まれていないと結論づけている。

Fajst & Matsumoto（2020）は「contact-induced borrowing scale（接触に誘発された借用語の尺度）」（Thomason 2001）を用いて、ロシア語と朝鮮語、ロシア語と日本語との接触のシナリオが、ロシア語に現れる朝鮮語・日本語の借用語の種類と合致するかどうかを検証している。まず、朝鮮語の借用語は身体語（例：“눈（nun）”「目」）、幼児語（“도리도리（dori-dori）”（乳児をあやす際にかける言葉））、感情表現（例：“아이구（야）（a–i–goo（ya）”「ああ」）などの「basic vocabulary（基礎語彙）」までがロシア語に借用されていることから「more intense contact（より濃密な接触）」を示す「分類３」に該当するという。Thomason（2001）の借用語の尺度によると、「分類３」の接触のシナリオは主にバイリンガリズムと肯定的な「language attitudes（言語意識）」によって基礎語彙までも借用されるというものである。著者らは過去の朝鮮民族学校や現在の韓人文化センターにおける教育によって朝鮮語が継承語として維持されバイリンガリルが存在するだけでなく、朝鮮語に対する肯定的なイメージをもたらしていることから、「分類３」

6　朝日（2012：90）は日本語の20語の漁撈語彙がサハリンの先住民族の言語に借用語として取り入れられているとし、その根拠として服部（1952）、山本（1968）、丹菊（2001）らによるウイルタ人とニヴフ人の文化と言語に関する文献を挙げている。Fajst & Matsumoto（2020）はそれら３つの先行研究を隈なく精査したところ、①服部（1952）は朝日（2012：90）のリストにある単語どれにも言及していないこと、②山本（1952）と丹菊（2001）はウイルタ語やニヴフ語、アイヌ語の魚名を調べており、日本語の魚名はあくまで先住民諸言語の魚名に対する日本語訳として記載されているに過ぎないことが明らかになった。つまり、朝日（2012）が日本語の漁撈語彙が先住民諸言語に借用語として取り入れられているとする根拠としている文献には、実際には日本語が先住民諸語の借用語として取り入れられているという記述は見当たらなかったことになる。一方、山本（1952）には「秋味は鮭のこと、アイヌは（čux–čex＜čukčep『秋・魚』）といっている。樺太では方言化して鮭というより秋味（アキアジ→アキヤジ）の方で通用している。」、あるいは「砂鰈（すなかれい）は方言で『ごそごそがれひ』または『ごしよがれひ』といっているもので、ギリヤーク語〔現在のニヴフ語〕ではウシク（usiku）という」というような記述が６語見つかったという（朝日2012ではそのうち３語のみをリストに載せている）。Fajst & Matsumoto（2020）は、以下の山本氏の背景から、ここで使われている「方言」とはウイルタ語やニヴフ語の方言ではなく、日本語の樺太方言を言及していると述べている。樺太庁博物館の館長として日本統治下の樺太に長年住んでいた山本氏が、樺太での生活から日本語樺太方言に精通し、こうした日本語の漁撈語彙が日本語樺太方言に使われていることを熟知していることは自然なことであると著者らは述べている。つまり、山本氏のこうした記述は先住民族の諸言語に日本語の魚名が取り入れられたことを意味するものではなく、樺太で使われていた日本語変種（つまり日本語樺太方言）で該当する魚をどのように呼んでいたかを描写したに過ぎないと解釈するのが妥当だと説明している。さらに仮に日本語の樺太方言でこうした魚名が当時使われていたとしても、だからといって日本語を学習した先住民族がそうした日本語の魚名を民族語にそもそもあった魚名と併用、あるいは日本語の魚名を好むがあまり伝統的な民族語の魚名を捨て去った、とすぐさま結論付けることは危険だとも述べている。朝日（2012）の借用語に関する数ページの記述にはデータや方法論に関する記載がなく、何を基にしてこの20語のリストを作成したのかは明確ではない。Fajst & Matsumoto（2020）は日本統治下となる前よりサハリンの地で先住民族やアイヌ人、日本人は漁業を通じた交流があったことから、山本（1968）が樺太で「方言」として使われていたとする６語を調査語彙に加え、ロシア語へ借用されたかどうかを念のため調査することにしたという。加えて、朝日（2012：90）のリストにあった「番屋」（漁師が夏の間寝泊まりする小屋）は現在の日本語ではほぼ使われなくなったものの、当時は使われていたことから調査語彙に加え、計７語を調査したと記している。

の接触のシナリオに合致するものであると説明している。

次に、日本語由来の借用語に関しては、基礎語彙はロシア語に借用されておらず、また樺太時代の日本語からよりもアニメやマンガなどの現代の日本文化からの借用に止まり、「オタク」などの世界的に借用語として広がっているような類の語彙に限られるため、借用の尺度としては最も低い「casual contact（軽度の接触）」を示唆する「分類１」に当てはまるとしている。一方、著者らは日本語とロシア語との言語接触の歴史を以下のように考察している。戦前の日本統治下の樺太には100名程度のロシア人しか居住が許されておらず、戦後は大多数の日本人移住者は日本へ帰還し、代わってロシア本土から日本統治の経験のない大量のロシア人がサハリンへ移住し、現在のサハリンの人口の大多数を占めるようになった。このことから、サハリンの地で大量の日本人と大量のロシア人の間で日常的に濃厚な言語接触を継続したことはないため、「分類１」の接触のシナリオに合致するものであると説明している。

さらに Fajst & Matsumoto（2020）は朝鮮語と日本語由来の借用語の「接触に誘発された借用語の尺度」（Thomason 2001）の分類における差を人口移動の歴史と接触度合いの相違から生じたものだと結論付けている。つまり、戦後もサハリンに残留した大量の朝鮮人は、新たに入植してきた大陸ロシア人との言語接触を日々重ねてきたことから、サハリンのロシア語変種には日本語由来の借用語よりも朝鮮語由来の借用語の方が多く取り入れられていることは理にかなっていると論じている。こうした考察から「接触に誘発された借用語の尺度」（Thomason 2001）の有効性を支持する事例を提供したと締めくくっている。

「borrowability（借用度合い）」（van Hout & Muysken 1994）については、朝鮮語・日本語ともに名詞の借用が最も多い点においては先行研究を支持したが、他の言語間の借用語の研究では動詞と形容詞がそれぞれ二番目と三番目に借用されやすいとされるのに対し、サハリンの調査結果では間投詞と形容詞の方が動詞よりも借用されており、よって部分的に借用度合いを支持する結果になったという。

意味変化については、Daulton（2008）に基づき（a）意味拡張、（b）意味縮小、（c）意味の下降、（d）意味の上昇の４種類の例が全て観察されたという。（a）意味拡張として、「오뚜기（ottugi）」（マヨネーズメーカーの名称）を「一般的なマヨネーズ」の意味で用いる例（２名）が挙げられている。（b）意味縮小として「한국（hanguk）」（韓国）が「韓国人」（７名）、さらには「おしゃれな人」（１名）の意味で使われる例が挙げられている。（c）意味の下降として、「게장（kedyan）」（カニを醤油や唐辛子の粉に漬けた食べ物）が「犬の肉の入った食べ物」の意味で使用される例（８名）が挙げられ、朝鮮語では「犬」と「カニ」の発音が同じであることから混同されたという説明が加えられている。（d）意味の上昇として「오빠（oppa）」（お兄さん）が「韓国アイドル」という意味で使用される例（２名）が挙げられ、韓国のメディアで男性の韓国アイドルが「오빠（oppa）」と呼ばれているためだと説明されている。また、「loan-blend（借用混成）」に関しては、（a）日本語と朝鮮語の借用混成、（b）朝鮮語とロシア語の借用混成の例を提示している。（a）日本語と朝鮮語の借用混成の例としては「*анкоток/анкаток*（ankotok/ankatok）（あんこ＋떡）」（あんこ餅）、「*иккадёт*（ikkadyot）（いか＋젓）」（いかの塩辛）が見られた。（b）朝鮮語とロシア語の借用混成としては「*чимчигрызы*（chimchigryzy）（짐치＋*грызы*）」（キムチをかむ人）、「*чимчижар*（chimchizhar）（짐치＋*жар*（jimchi ＋ zhar））」（キムチ炒め）が見られたという。

ここまで、Fajst & Matsumoto（2020）の概要について見てきた。この研究ではインターネットを用いた質問調査の結果を用いて、サハリン人の借用語には朝鮮半島南部の方言的特徴を持つ

変異形やロシア語化された変異形が存在すること、日本語と朝鮮語の借用混成および朝鮮語とロシア語の借用混成が見られることなどを定性的・定量的に明らかにした。理論的検証に関しては、「contact-induced borrowing scale（接触に誘発された借用語の尺度）」（Thomason 2001）を用いた分析結果として、朝鮮語の借用語は「分類３」の「より濃密な接触」に該当し、日本語の借用語は「分類１」の「軽い接触」に該当するなど、サハリンにおけるロシア語と朝鮮語の接触度合いとロシア語と日本語との接触度合いと実際に観察された借用語の種類を適切に測る尺度であると結論付けている。「borrowability（借用度合い）」（van Hout & Muysken 1994）については、朝鮮語・日本語のいずれの借用語も名詞の借用が多い点に関して支持する結果となった。いずれの結果も様々な言語間の接触によって生じる借用語に関する理論構築へ貢献し得る事例として一定の評価を与えてよいものだろう。

これまで200名を超える規模の言語調査をサハリンで行った先行研究は存在しないため、Fajst & Matsumoto（2020）の大量のデータに基づいた定量的な分析はサハリンのロシア語変種における借用語の特徴を大雑把に把握するという目的は達成されたと言えるだろう。また、本土のロシア語にはこれほどまでの朝鮮語の借用語は使われないことから、極東ロシア語変種の一面を明らかにしたという点においても評価に値すると思われる。その一方で、Fajst & Matsumoto（2020）自身が認めているように、質問調査で得られるのは、あくまでも回答者の自己報告であるため、実際の談話に現れる借用語との間に差異が生じている可能性は否定できない。今後、サハリン人の談話データなどを収集・分析することにより、質問調査の結果を裏付ける必要があると考えられるが、調査対象とする多様な借用語彙が自然談話でもれなく現れる可能性は低く、調査方法には工夫が必要となるであろう。

また、Fajst & Matsumoto（2020）の回答者には戦前から戦中に移住してきた朝鮮人、北朝鮮出身の派遣労働者、中央アジアから移住した朝鮮系ソ連人という３つのグループは存在しなかったために、「朝鮮系」か「非朝鮮系」かで分類して分析が行われたが、今後はこうした背景を持つ朝鮮系サハリン人からのデータも含めることで、サハリンに住む多様な朝鮮系サハリン人の言語使用を明らかにすることも重要だと思われる。同様に回答者に先住民族がいなかったことから、今後は日本統治を経験した先住民や次世代からのデータを得ることで、日本語由来の借用語の新たな側面が明らかになるかもしれない。今後の展開が期待される。

４．今後の展望

第２節ではサハリンがこの一世紀の間に複数の国家の支配によって劇的な人口移動が繰り返され、それに伴い激しい言語接触、方言接触が重ねられたことを示した。第３節ではサハリンの日本語変種と朝鮮語変種、コード切り替え・混用、サハリンのロシア語変種における借用語に関する代表的な先行研究を概述し批判的な考察を加えた。こうしたレヴューを通じて、サハリンの日本語変種と朝鮮語変種に関する研究の多くは、ごく少数の話者から得たデータを基にいくつかの例文を示しながら定性的にその言語的特徴を記述したという段階にあり、いわばスタート地点に立ったばかりであることが明らかになった。今後は、より多くの話者からデータを収集し、言語内的・外的要因も加味した緻密な定量分析を展開し、かつての樺太で形成された日本語変種および朝鮮語変種の特徴の把握に努める必要があると考える。戦後から70年以上が経過し、樺太時代を知る高齢層の人口が激減している中、こうした調査研究を進めることはまさに急務であると言える。一方で、そうした接触変種が次世代に継承される過程でどのような変容が生じたのかに関しても調査究明することが望ましいと考える。

また、サハリンがロシア語、朝鮮語、先住民諸言語および日本語が交わる多言語社会であることから、今後はそれぞれの言語を専門とする複数の研究者が協力し合うような研究体制が望ましいと思われる。上記の先行研究で語中の無声音の有声化という現象に関して研究者によって解釈が別れたことを顧みても、各言語の専門家との連携が必要であることは明白である。とりわけ、かつての樺太がサハリンとしてロシア語圏になってからの期間が長いため、ロシア語からの影響を念頭に置いた分析・考察が必要だと思われる。

加えて、在樺コリアンの日本語・朝鮮語のコード切り替えの現象をこれまでの研究の蓄積のある在日コリアンのコード切り替えと対照することで、朝鮮語と日本語のコード切り替えの普遍性・個別性とその要因を探ることも可能になるものと思われる。

以上のことから、サハリンにおける方言接触・言語接触に関する研究はまだまだ調査の余地があり、今後の展開が期待される、と言えるだろう。

参考文献

朝日祥之（2008a）「サハリンの樺太方言における二拍名詞アクセント」『北海道方言研究会年報』85：42–56. 北海道方言研究会.

朝日祥之（2008b）「サハリンに残された樺太方言に見られる言語変容―二拍名詞のアクセントを例として―」『日本方言研究会第86回研究発表会発表原稿集』37–44.

朝日祥之（2012）『サハリンに残された日本語樺太方言』明治書院.

李月順（2016）「サハリンにおけるコリアンディアスポラに関する一考察」『東アジア研究』第64号，105–121 大阪経済法科大学アジア研究所.

大沼保昭（1992）『サハリン棄民―戦後責任の点景―』，中公新書.

樺太庁編（1933）『樺太概要 昭和四年』，樺太庁.

樺太庁内政部総務課 編（1940）『昭和十五年樺太庁統計書』，樺太庁.

金美貞（2008）「日本語と朝鮮語の接触について」『日本語學研究』23：15–29

クージン・アナトーリー・T（1998）『沿海州・サハリン 近い昔の話（翻弄された朝鮮人の歴史）』，凱風社.

ステファン・ジョン（1973）『サハリン―日・中・ソ抗争の歴史―』，原書房.

中山大将（2012）「韓国永住サハリン朝鮮人―韓国安山市「故郷の村」の韓人」今西一編著『北東アジアのコリアン・ディアスポラ―サハリン・樺太を中心に―』，208–295．小樽商科大学出版会.

平山輝男（1957）『日本語音調の研究』，明治書院.

北海道サハリン事務所（2019）「サハリンの概要」，
http : //www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/russia/sakhalin 2019.pdf（最終閲覧日：2020年１月17日）.

松本和子（2016）「社会言語学の研究動向と方言研究との接点―接触日本語変種の研究を中心に―」（特集「日本方言研究の50年を振り返る」）『方言の研究』2：131–150.

Asahi, Yoshiyuki. (2008) Features in Karafuto Japanese amongst Uilta and Nivkh speakers. Sakhalin Symposium at Hokkaido University, Hokkaido, Japan. pp.1–18.

Asahi, Yoshiyuki. (2009a) ‘Cookbook Method’ and koine-formation: A case of the Karafuto Dialect in Sakhalin. *Dialectologia* 2. pp.1–21.

Asahi, Yoshiyuki. (2009b) Linguistic features of a Japanese variety in a Japanese diaspora: Evidence from a Sakhalin Japanese speaker of Uilta. In Toshiro Tsumagari (ed.) *Saharin no Gengosekai [The Language World of Sakhalin]*. Sapporo: Hokkaido University Press. pp.27–40.

Daulton, Frank E. (2008) *Japan’s Built-In Lexicon of English-based Loanwords*. Clevedon: Multilingual Matters.

Fajst, Valeriya and Kazuko Matsumoto (2020) Japanese and Korean loanwords in a Far East Russian variety: Human mobility and language contact in Sakhalin. *Asian and African Languages and Linguistics* 14.

Thomason, Sarah. (2001) *Language Contact: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

van Hout, Roeland. & Muysken, Pieter (1994) Modeling lexical borrowability. *Language Variation and Change* 6: 39–62.